特54
54

蓮華生涯鮮血の雨

第四號

柳葉亭繁彦著
稲野年恒畫

東潮花口演

凡告

此物語は天明の年間下總國葛飾郡關宿の藩士小泉半之亟と安達辨之助の兩人が一婦人の爲に遺恨を含み藩邸の馬驟所に於て武藝の試合を爲すに始り半之亟竟に辨之助を討て君侯の氣色を蒙り割腹の命下る時偶々養傳寺の日功和尚參詣して之を救ひ關宿へ伴ひたるのち愛に溺れて鄕左衛門お花を引具し養傳寺に詣る歸路水懸峠にて烏山の惡僧天海に殺されお花を奪はれたる件んより半之亟の養道飯高よ來り修行中花賣お婆お丑の養女お菊と奸通したる末お丑の一子多九郎關宿の養傳寺を脅迫し金を得んとして却て老僧に說破され更に養道と義を結び朗師が謀殺の彫の靈像を盜み中山の行者と披露し上總國一の宮に於て蓮華往生を企て多くの人を欺きしも俠客法華丈助の活眼に見顯され捕縛となる有名の談柄にして舌耕師伊東湖花氏の口演なるを柳樂亭先生懇ろに筆記せられ逈討拾回限り讀切と成る最面白き稗史なれば御評判御購讀を願ひ上候也

明治十八年八月八日板權免許
明治十九年一月　日發兌
定價六錢五厘
通計十回讀切
編輯人　東京府士族　中村邦太郎　京橋區鈴屋町十三番地
出版人　東京府平民　森川林三郎　同區南鞘町七番地
大賣　東京日本橋區新芳町十二番地　良明堂
同　馬喰町三丁目　自由堂
同　蠣殼町壹丁目三番地　信文堂
捌　同　京橋區南傳馬町三丁目　松成堂
所　横濱太田町二丁目　萬字屋
相州横須賀沙上町　鈴木屋

小泉半之亟と縁組の約束したるお花成ば佶と思ひ付や妾彼が言葉に從ひ仁節義を取て堅く動こざれ共網裏の魚よ異成れ共逃る事を得可き竟にい彼が爲に凌辱を蒙らん若疑ひなし恁れば今にして身を護るの術を施さんに後悔嚙と噛及ばじと曲々思案なしゝが素より退敵女兒成ば忽ち發狂の体を顯はし或は怨り或い笑ひ又い傍の品を取て叩りに打碎く抔思ひの儘に舉動しかば偽の發狂と い誰か知可き人皆舌を卷き退歩して言葉を交へんとも爲ず然共嬋娟たる美婦なれば奈にもして良醫師に診察せしめ病氣を全治しめて心に從せんと天海も是が爲に胸を割て考へけるが世を忍ぶ强盜の隱れ家へ醫師と迎ふる譯にも成ねば心成ぞも日と消光しが茲に此天海が股肱耳目の小賊に小船の藤治と云る者小賢しき男成ば一時天海に對ひ囁くやう頭領彼女を得給ひて既に一ヶ月よ及べ共未ざ御心に從い它剩へ發狂と成て千般の戯言を吐く此頃の光景實に言語に絶たり然れ共某窃に思ふに彼夜陰は發狂の体なれ共白晝い幸ひ普通の人に異らねば偽りれ謀事を以て何方へ賣代ふし是迄彼の爲よ費したる處を補ひ給ふ可しと言けるにが天海實にも と思ひ小船の藤治に命じて忍び〳〵にお花を賣可き事を談合せしめしに神名宿の旅籠屋湊屋と言るが是を聞て然る疵物とは知らぞ五拾兩にて購とんと言ければ天海は再回小船の藤治に命じお花をよき程に賺し欺きけるにお花い謀略圖に方り天海我を眞の發狂人なりと思ひ詮方無く我を賣んとの計較なりと思ひし故少しも惡びれ它言が任意伴なはれて山寨を立離れけり恁て藤治いお花を將て神名宿の湊屋方へ心ざし或松原まで來りしに路傍にあやしげ成る小屋を立て旅客の足を休め茶を煎沸て活業と爲る老婆が見世よりあや〳〵と呼者あり誰成んと驚きて振返れば是い是此近邊に於く俠客ゝ稱るゝ瀧の圖九郎と言者ありけり藤治斯と見て小腰と僂め慇懃に挨拶るに圖九郎お花の艶麗なるを見て是成す女を拐掣來つて何れへ

り賣んと爲る成可しと思ひ藤治ゑ對つて言やう足下が將て來つる娘い此邊に稀なる艶女なるが足下ご言合したる者にても有か或は例の者なりや事ゞ原因を告よと言けるに藤治頭を搔て否僕が愛女にも有ず實い去方に久しく養なれ居たる者成ゞ少しの事故有て當驛湊屋へ連行き五拾兩に身を賣る契約調ひ只今彼が方へ出向く處にて候と答ふるを團九郎聞了りて忽ちに思ふやう我卅余歳に及べども未た定まる女房無く勿論是彼進むる者有ども心ゑ適い ず然るに此女世に稀なる容色有て殊に身を賣可き者と聞ゞ手に入んこと容易なり談ふて見ゞやと思ひ俄に呵〳〵と打笑ひて藤治ゾハ何とか言此女兒賣物なりと有ゞ何方へ賣んも障い有まじ奈に五拾兩にて某ゞ賣まじきや我ゞ足下も知如く獨身にして萬づ不自由成ゞ乞請て妻とせんと思へりと他事無く望み懇るに藤治大いに當惑あし暫く考へしが所詮賣と告て謝絶んと思慮し數回後ろを振返りて親分い某の恩人あるに此女を購はんと宜ふて

ろ幸ひ然らゞ御心に任せんと申ゞ可き筈なるに奈にせん此女陽にい聊かも景容に顯れゞして何樣〳〵の宿病有り故に今親分の望に任ゞとも却つて御心に違ふ事有んは必定なれゞ此義い思ひ止り給ふ方然る可らんと畏る〳〵述しゞ團九郎訝しく思ひ窃かに女の面を見るに少しも異りたる体なく莞爾と打笑て佇意たるさま藤治の言語と齟齬すれゞ偖い藤治我にい恩義有ゞ若し我に賣よと言ゞ身の代を得らるまじと思ひ事と設けて欺く成んと思維し懐中より五拾兩の金子を取出し是を藤治に與へ此女心に適へゞ是非とも我に賣可しと達ての望みに藤力詮方無く某し親分の爲を思へゞ實を告て固辭參らすると雖斯まで乞るれゞ奈に共爲難し今は御心に從はん何れへなり共將て行給へと漸くに納得せしかゞ團九郎大いに悅びて花を請取て藤治に別れ應て我家へ立歸り今日途中に於て小船の藤治に出會ひ此女を貰ひ來れりと乾兒の者へ披露に及びしかを一同お花に初見參の口誼を述るにお花眞の

發狂ならねゞ温柔に應答へる体通常の者に變らぎ依て愈〳〵藤治の口上を僞りと思ひ我ながらいしくも購ひ得たりと團九郎圓なる眼を細くしてお花を打眺め我奈なる果報有てか怨る艶女と枕を並ぶる僥倖に遭遇しやと心中恍惚として何事も捻置き日の暮るを待居たるに漸々大陽も西山に春き百鳥も塒へ急ゞ其日も全く暮て疾亥の刻に至りしかば乾兒の雛彼に課せて我臥房を設けさせ自らお花の手を引て巫山雲雨の契りを結ばんと爲しに思ひも撫ぎお花そつうと立よと見ゞしゞ小指の先を食さき我鮮血を以て面を塗り緑の黑髪を左右にかきさゞきて兩手に握り團九郎を見て磯と睨付たる其顏貌の恐ろしさ恰も惡鬼羅刹の如く身の毛いよ立計りなれゞさしもの團九郎も呀苦と呼びて後居に揑と倒びしが茲に至つて藤治が懇ろに謝言たるを思ひ出し我慢りて五拾兩の大金を無にせりと只管後悔せしか共今更に術計無れゞ其翌日より一室へ押込め交代乾兒の者に看守させ茲ゑも又二月餘りを經過たるが或日團九郎何方より聞出しけん近來神名宿の宿稍蠱處なる無住の鬼子母神堂へ法力炳然なる法華の行者來りて加持祈禱と爲すに壹人として癒ざる者無し當代有難き名僧智識なりと人皆尊敬なせゞ試みにお花の祈禱を賴を若し病氣の全快まじきにも有ぢと思ひ件んの趣きお花にも言ひ聞せ乾兒樹治を從て例の鬼子母神堂へ赴むのせけり

○第六回

案下某生小泉半之丞の養道い柏木に於て惡兒多九郎を欺き竟に谷へ蹴落し後日の憂ひを拂ひたりと打歡び夫より足に任せて所々方々を遍歴なし到る處法華經の功力廣大なる事を說き傍ら加持祈禱を爲すに如何の事ゑや願れゞ必ぢ應驗有こと比喩ゞ響の物に應じ影の形ちに從ふ如く成ゞ誰か白徒と知可き信心肝に銘じて只管敬ひ尊ぶける程に之ゞ爲得る處の米錢山の如く未だ幾許の日を經ぎして既に四五百兩の所得と成りしかゞ心中限り無く嬉しく思ひ此所に三日彼所に五日逗留して彼神名宿の宿稍蠱處

なる鬼子母神堂に無住なる事を聞き又々杖を止めて例の祈禱を始めけるに爰にても大いに評判高く老若歩を運ぶ者引も切せず大体日々二百人より下らざりしが例加持を爲さい奥まりたる一室にて病者の外い絶て山入を許さゞ怎て一日此處の俠客龍の團九郎ゞの女房發狂せし迎乾兒勘治が付添此鬼子母神堂へ入來り何卒病氣全快せる樣祈禱を施し給ふ可しと言入たるに此日い殊に病者の參詣せる者多くして六拾番の札を得たしりかゞ勘治い お花と供に順番を待詫び居たる裡漸く我ゞ番に成たり迎案内者い勘治を其所へ殘し置去來此方へと先に立て一室へ伴なひ行とお花は心中に可笑思へど然有ぬ体にて座に付き然にても法力炳然

なる法師とい奈成る人かと窃に上段と瞰仰れゞ年い僅かに廿歳に過ぎ色白く愛敬付て畫し如き美僧豈人端然として居り居たれゞ偖も艶麗成る男も有ゞ有ものかなと猶能く瞳を定めて熟ゞ見るに道者奈に此僧は是別人成ぎ我良人と定りたる小泉半之丞の養道なりけれゞ呼吾さゞ思いぎも走り寄て衣の袖に取縋りよゝと計りに打泣にゞ養道も斯と見て打驚き暫くい詞も出ざりし少稍有てお花に打對ひ偖も珍らしや御身遠々調宿へ來られ志操の程も聞え給ひしか共師の命盤重成ゞ再回對面爲る事叶はぎ斯て其日剃髪の姿と成り鍛程無く飯高の檀林へ赴く可しとの事に依り闇宿を立出水愚昨ぎで來りたるに無恙や御身の父御朱に染

て打倒れ居給ひしうバ千般に介抱あしけれ共疾半日も程經たる事成ば奈にとも爲る能はぜ某又師より時限の添狀を携へたるに依り止を得ぜ彷の窪き處へ亡體を押入れ心計りの回向なして立去しが是必ぜ盜賊の所業にて假令バ御身を奪いんと爲しと父御手強く防ごれしうバ殺害に及びしやも計られず左に右御身の上も氣遣しけれバ其儘に飯高へ立越たりしが故有て更に關宿へ歸り又もや彼所を出て身を雲水の行者となし普く諸國を巡歷なす途中なるに思ひきや吾妹子の慈無き姿に見にんとはとて只管寄遇を感ドけるにお花いはぶり落る涙を止て妾御身と過世の契有て妹と脊の約束は結びしかど其事は只春の夜の夢と成て御身關宿へ赴き給ひしと聞き父御の慈愛に依て偶面を合したる悅びい未だ盡ざるに忽ち哀みを生じ水無瀬とか言所にて數多の曲漢に捕へられ既に此身を辱しめんと爲られしを辛く其場い遁れたれ共夫より賊首天海の[illegible]に抑留せられ樓層の艱難を蒙り次るをも拒て節操を破らぜ云々の僞策もて僞り賺せしも又もや瀧の圖九郎に身を購いれ日夜妾を捕へて心に從へと云ふ其事極めて迫りしうバ再回發狂の体を示し容易彼を欺きしに近來法力炳然成る聖僧この鬼子母神堂に杖を止め多くの病者を救ひ給ふ由を聞て圖九郎情慾の念偏へに止まらぜ妾ゲ病狀と全治せ想ひを遂んとして乾兒勘治に妾ゲ伴はせ茲へ送ゲ來りたれバとろ絶て久しき御身ゴ蟠無く遇逢嬉しきに付て哀しきと今迄少しも知ざりし父御い盜賊の爲に命を縮め給ひしとか若し此緯遽疾く知バ父御の讎やいか夫なりゴ措く可き一刀恨えんものを夫さへに六日の菖蒲と成たる妾が本意なさを察ぜ給へかしと言て流るゝ涙瀧の如し養道い道理有るお花ゴ述懷を聞て俱に哀れを催せしゲ氣を整て種々に慰め勵し越方行末の緯問もし聞も爲たき事濱の眞砂の限りも無れど今日は一旦何氣無体に立歸り御身圖九郎ゴ言れんにい妾ゲ病痾中々一日二日の所論にてい癒難くせめてい一週も堂籠りして信心解怠せバ必

定應驗有可しとの事成バ妾ゲ身を不便と思さバ七日の間身の暇を給り彼所へ送り遣り給いれよと言んにい彼御身を他迄思ふ事成バ果して望の如く成可し然らバ心留無く打語らひ參らする北能か異しむ者の有可き御身既に知如く未だ數十人の病者彼所に居バ御身壹人に太く隙入う萬一人に疑れなバ後日の妨げとも成る可しと細ゥに言諭ぜ謀を含めて再會を約する物からお花い余波惜きこと口にと謁されねど何樣養道の敎へに委ゲ圖九郎を謀りて首尾能く脫出し爰ゴ來つて行末の事談合せんにい如ず と儘に思ひ返し詞と發へて一室を辞し廳で乾兒の勘治を引伴し圖九郎の住家へ立歸りける程に先づ養道が法力を歎稱し彼が言るまゝ辨を巧に請望むに圖九郎は委細を聞て太く悅び若干の食物を齎せ七日の賄ひに充よ迎此夕遂勘治をして重てお花を鬼子母神堂へ送り遣りたれば養道も大に悅び賄男七助へ些の異藥りを與へて其口ゥ絶しめ竟に兩人一緒に在て打語らひしが素より相思ふ交情と言ひ一旦夫婦の契ゼで爲たる事成バ心駒走りて止らぜ折しも有れ軒を旋る夜嵐颯と吹入て枕上の燈火を打消たれバ這者不意と呟ながら果い如何なる物語と成けん增近く秋を送る蟋蟀の聲のみ聞にて夜い疾や亥中を經過たりけり話說分頭茲に瀧の圖九郎が乾兒わて雞にお花を送致來りし彼勘治は此來打續きて仕合無ろく貴なる物に疎れしかバ然る可き博奕場に臨みて端錢を乞んと半襟の垢付たる女衣裝を纏ひ豆絞りの手拭に面と隱て壹人徘徊するところに八洲廻りの小更提灯を上げて勘治をば送りしがアレ召捕よと下知せれバ畏りぬと應答も敢ず探偵更の面々手毎に十手振翳かし御諚ざうと言なゞら前後左右を取卷けるにゾ愕然として打驚ろきし勘治と途を失ひ忽ちに捕縛れんぜせしが恰も好月い雲に入て善惡も分ぜ剩さへ夕遂の雨ゴ道泥濘て自由の働き成ぬゴ探索更共先を爭そひ思いぜも轉て提灯の火と失ひしかバ勘藏得たりと一ト聲喚て二三人を突例し雲を霞みと逃去しが道程

一里計り息も吻き走りたる成べ咽喉乾きて堪難く身体又勢れたるゆゑ暫く休息せんと傍を見るに孫て案内知りたる彼鬼子母神堂なれた是幸ひと思ひ窃に様の下に潜伏て捕亡の小吏を遣り過ごさんと辛く逼込たるに案の如く大勢の小吏捕治と遂懸来りしか共よもや此堂の様下へ忍び入たりとは知ざれべ皆々兎を走過行くに々吻と一息吐て嘯て立去んと爲るに異しむ可し奥の方に男女機密に打語ふ容子手に取る如く聞えし故偖は何者ぞ忍びて密曾を遂るにこそと思ひ打笑つゝ耳引立て聞に女は我親方滝野圓九郎が妾にて襄に自個送り來りゑお花と思しく又其男と云るは活菩薩と尊敬そる法華の修行者日道なり〻悟りしかべ膝と打て大に驚き彼等何者成迚恁る大賊の所業を爲しけん此件りの秘事我耳に入つるぞ幸ひ是より親分に告知て諸俱に縛られたる腹癒爲んと怒り呟き漸く外面へ退出一散に走り皈りて養道お花の始末ケ様〳〵云々なりと具に注進に及びけるにぞ圓九郎顔色忽ち青くなり赤く成り圓なる眼を逆立しゞ怒り心頭より起り堪難くや有けん秘藏の一刀を腰に帯び捕治を始め四五人の乾兒を引連れ様に様んで急がせしかべ裁程も無く疾や鬼子母神堂の此方迄駈付しかべ圓九郎乾兒に耳打して手筈を定め同時ドッと押寄たり案下某生鬼子母神堂の賄男七助い宵に養道がお花の事を打明て這は我ゞ未だ關宿に在つる時の女房にて兇漢の爲行方知れぞと成しが今日不意圓九郎の許より病翁新禍と報まんとて連來り三年ぶりにて邂遇たれば堂籠りに事托斯の如く伴りて招き寄たりと真事僞事說交て物語り聞するに田舍兒の通常成も深くお花が薄命を憐れを少しも疑ふ事無く夫婦久〳〵の對面を悦び聞えなどして嬉て臥房に入て寐たりしは丑三ツ頃と思しきに不圓目覺しが腹中迫り堪難により厠へ行んとて暗室をろ〳〵ぐりながら樣頻へ出んと爲るに誰共知れず四五人の曲漢銘々大刀を携え覓ひ寄る体成べ嗟若言て無きしゞ若や彼等踏込なべ養道お花の爲悪かる可しと思

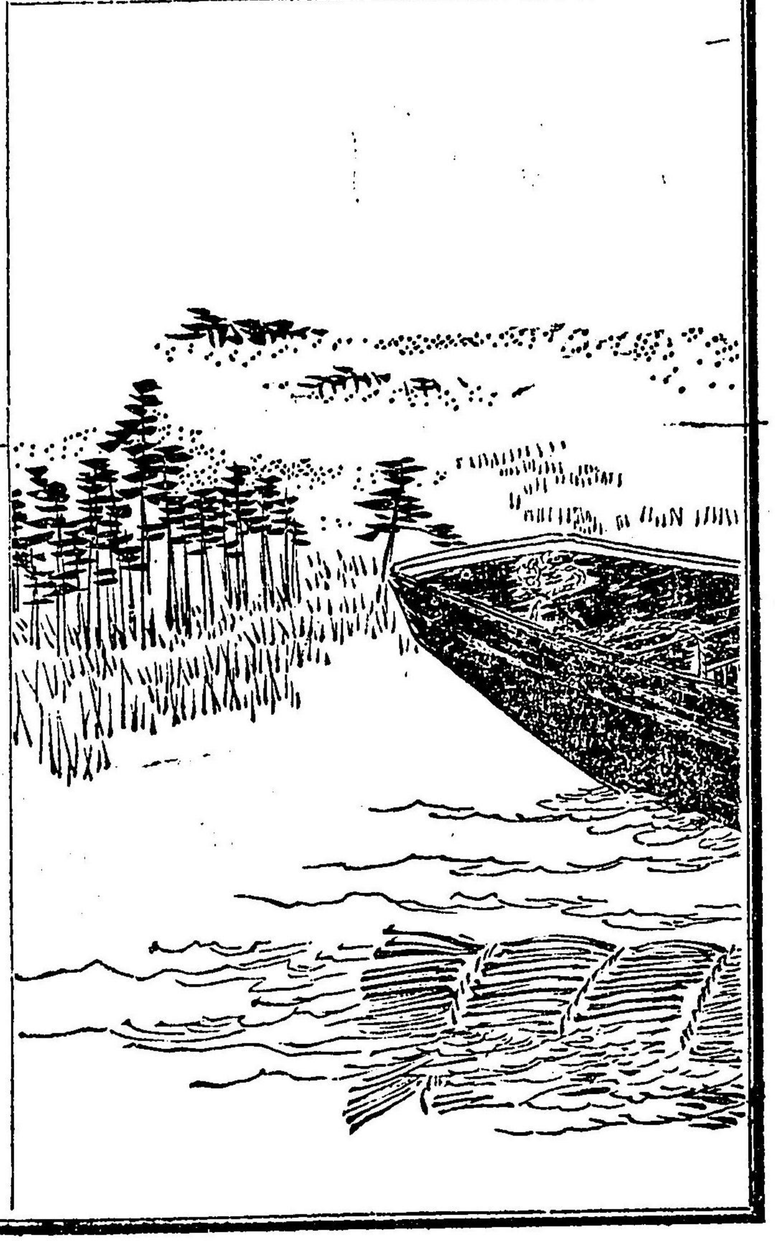
ひ震へ怯き足も空さまに兩個が臥房に入て事情い素より知る由無れと云々成べ御身等兩人爰に在んは最危ふし疾く間道より後ろの山に遁給へと手眞似して其景況と語るを聞兩個い吃驚起上り偖い圓九郎我輩の謀と是知り深夜寄來りて恨みを晴すと覺えたり然い始めより覺語の事成ぬも遁るゝ丈い遁れて見ん誘給へとて取ものも取敢ず走り出る養道に引續きてお花も裾端折り既に近出さんと爲る處へ飛鳥の如く走り來る圓九郎お花ありと見しかべ何うと酬ん猿臂を伸して首筋を引掴ミツレと言て傍へ投付れべ乾兒の者共居重りて高手小手に縛むる神圓九郎い遽かに泳行く養道の跡を追懸たれ共竟に行方を見失しゞお花を生捕たる事を悦び理無くも引立て我ゞ住居へ連來り奈にして鬱憤を晴さんかと思ひしが迚も助け置く可き者成ねべ充分に弄殺とて腹癒んとお花を庭へ引摺出し二本の松の樹へ左右の手を確と結付て身動き成ぬ様に爲し撥き圓九郎い明光々たる大刀の鞘を拂つてメカ〳〵と進ミ寄り奈にお花汝何者成べとて我が大恩を思い忘僞狂氣に成て我を欺き加婦成ぞ鬼子母神堂に堂籠りすると僞り旅僧と枕を合せて情慾を逞ましうし我面を凌辱るとの甚しきや我故有て此件の事と聞出ゑゝかべ兩個共搦め捕て不義の成敗をあさべやと思ひしに彼僧遁早く何方へか逃れ行たれは諸俱にころ殺しいせね追付け在所を搜出し我ゞ一刀に引導を渡す可けれべ汝壹人先達て黄泉の道案内せよと刃をお花の眼先へ翻かして散々に罵り騒ぐをれ花い密事の顕れたりと悟りし際より命い豫て無ものと觀念なし居たれべ威丈高に成て脅迫る圓九郎を郤に見返り何様御身我身を購ひ給へべ心の儘なりと思し給ふい道理有に似たれ共抑々小船の藤治に連られ神名宿へ赴く途中我身と購給ふ時藤治我病ひ有ことを告ず只管固辭しかども御身疑て聞入給はす強て五拾金に換られたるい御身が穿鑿の足ざるものにて人を咎むるに據なくて又我身を金に換たれば心の儘なりとは宣まへど开者只御

身壹人の思慮にて妾始めより承諾したるにも非ざ怎れば假令何者と密通なしたり迚何ぞ御身の恨みを聞く可き況て今宵語らひたるは我年來行方を暮居たる我夫あるをや御身自らの智惠淺く思慮乏しくて却て妾を恨み給ふは何事ぞやと言返すを團九郎聞も敢す磯と睨付け汝口賢く言逃れんと爲すと雖も爭でか免さん我藤治の許より汝を購ひ去時我未ざ女房無れば此者我に賣よと言しい汝其所に居たれば必ず覺え有んよしや然無迚五拾兩の金に換たる汝我が目を忍びて不義密通なしながら飽迄道理めかして我意を貫かんと爲る共如何んぞ誑されん愛悟をせよと詰寄つゝ泣叫ぶをも事共爲ず面部手足の差別無く廿八ヶ所の疵を

被らせしかば可得のお花今は疾や壓さへも揚得ず栓されたるまゝ悶へ苦しみて息絶しい哀れと言も愚かなれ

○第七回

恁て團九郎は思ひの儘にお花を弄殺みたれば少しい怒の胸を治め乾兒の勘治三八抔言ふ者に課せて死體を古き俵に押包み夜の明ぬ間に急がし立て烏川へ棄させしが是より先蔭道い賭男七助が報知に依りて慌て忙き後の山へ逃んとして一町余り駈出せしに我に續きて逃れ出たりと思ひしお花の姿も見ゆ足音さへ聞えざれば偖これ花逃後れて憂目や見つる最惜しとは思ひながら詮術知を忙然として居たる處に忽ち團九郎の聲と思しくて街妻い疾く捕へたるに奸夫何處へ走らんと爲るやと疾風



の如く追懸來る容子なれば再面打驚き斯ては叶はじと疾走に壓里餘り逃延しかば漸く追來る聲い遠退だれ共前面は聞ふる烏川の急流成を進退殆究まりて遠近を見渡せに曉の星影にも夫々と知るき辻堂有ければ是屈竟と思ひ走り入て裡より戸を閉固め息を殺して窺ひ居たれど梢と渉る松風と里近き八聲の鷄を聞のみにて絶て追來る者有ざる故眼立たる毛穴も舊に復りて稍や蘇生たる心地しついつ迄斯て在可き何れなり共落行んと嘯て辻堂を立放れ川に沿ふて二三町歩み來るに艫柏子可笑船唄諷びながら此頃の霖雨に水嵩增て平日よりい水勢射るが如く成ども事共爲を此方を投して漕來る一艘の快船有しかば發道太く悅びて思はぜも聲張上げ是は法華の行者ゑて旅する者成るが今宵盜賊に出逢ひて辛く一命い取留たれ共身に一錢の貯へ無く前面へ渡らん便無れは御身一点の厚意をもて某を打乘せ向ひへ渡し給いんにい然計りの陽報無らぜや聞分給へかしと數回叫びしにぞ船頭漸くに聞付て开者いと易き事成ども見らるゝ如き急流成バケ程の船ゑて横斷る事い覺束なし但し茲より拾丁餘り川下にい船寄岸も候へば夫たに厭ひ給はぜば伴ひ參らせんと云ふ何か偖此河壹ツ越たらんにいと思ふを以て發道再回聲揚て猶千般に賴みしかば船頭は嘲て船漕寄て發道を打乘せ疾や川中まで到りしが明行く空に顏見合せて船頭驚きたる面色しつ端折たる裳と靜と下して船端に低頭雛に法華の行者にて旅する者と宣ひしに某も彼宗門成バ痛いしく思ひ斯い誘ひ參らせたるゞ思ひきや御身い是我が親子の恩人に在さんとは今迄の無禮は忍辱の佛眼もて御免し給ふ可く偖も何等の事有てか未ゞ夜深きに此邊傍をバ呻吟て山賊に出會給ひけん勿体無く候へとて頻りゑ敬ひ尙ぶにぞ發道訝しく思ひ某は遠國の沙門にして絶て御身と見知らね共何と無く相知る人の如し抑々御身い何處の人にて我を斯く見知り給ふやと云ふに彼益々身を暇しめて額付つゝ某は此邊に住て漁り爲る力松と申す者な